

32 ひょうろん
評論

場面：ドキュメンタリー番組

状況：言語教育についてのドキュメンタリー番組

登場人物：A（男性、ナレーター）

(BGM)

A: 外国語を学ぶとき、私たちは気づかないうちに、ある「考え方」に影響を受けている。

それは、ビリーフ——学習者や教師が持つ、「こうあるべきだ」という信念である。

中でも、発音に関するビリーフは、学習の姿勢を大きく左右してきた。

「良い発音とは、ネイティブのような発音である」。そんな考えが、長いあいだ、外国語教育の中で常識のよう

に語られてきた。

だが、世界の現実が変わっている。今、英語を話す人の多くは、英語を母語としない人、つまり、非母語話者だ。世界には、シンガポール英語、フィリピン英語、インド英語、そして、日本人が話す英語など、さまざまな発音が存在している。それぞれの発音には、その人の文化や背景が映し出されている。

それでもなお、「標準的な発音」だけが正しいとされ、ほかの発音が低く見られることがある。それは、特定の発音を理想とする古いビリーフに、私たち自身が今も縛られているからかもしれない。

このビリーフを変えるには、学習者と教師の両方が、自分の中の「ビリーフ」を見つめ直す必要がある。

学習者は、「ネイティブのように話せなければ失敗だ」という思い込みを手放し、「相手に伝えること」を大切にすべきだ。教師は、「正しい発音」を守る立場から、「多様な発音を認める立場」へと変わらなければならない。

コミュニケーションの目的は、まねることではなく、通じ合うこと、理解し合うこと。つまり、良い発音とは、通じる発音のこと。それが、本当の意味での「良い発音」であり、「良いコミュニケーション」なのだ。言語の多様性が尊重される世界へ。そこから、新しい言語学習の姿が見えてくる。